



## 弥勒菩薩の手

村岡 悠子  
(山口)

このごろの私  
コロナ禍以来外出も激減し、  
人との出会いも稀で、夫と自  
然を相手の日々です。歌はい  
つも、身辺の爪木を拾い集め  
たようなもので、誠に  
拙いながら、自らの心の友と  
して詠み続けております。

栗拾ひ老いには厳し枝の下折りたたみチェアずらしずらしす  
栗の実のよろしき重さ載するとき弥勒菩薩のやうな手となる  
荷を送る道ひと処コスモスの永遠のやうに陽を浴びてをり  
船ははや岬めぐりぬひとすちの水脈をわたしに見せそれも消ゆ  
この海に戦艦陸奥の沈みけり波は私のズックまで来る  
入江なるテトラポッドに護らるるつましき町に建て替はる家  
ヒトてふは捨てる生き物ペットボトルタイヤサンダル核のゴミまで  
うつくしき町上かみのせき 関核、ゴミの中間貯蔵問題に揺る  
人間は地球をどこまで耐へしむる惜しまず与へやまざる星を  
バス道へせり出す枝をふるはせて伐りゐる夫を隠す緑陰  
畑荒れて一面のニラの花ざかり獣の餌はもはや植ゑじと  
自然とは別れも言はでふつと去る夏のわが友つくつく法師  
今年の暑さ凌いで凜と里芋の葉は玉宿し玉は空やどす  
送りたる栗とどきしや独り身の灯しに艶を保ちてゐるや  
有線は水曜夜の里びとへ語るかたり部やさしき声に



## 錯覚の夏

多田美慧子

(宮城)

このごろの私  
子どもに連れられ、初めて  
ユーミンのライブコンサート  
に行った。ユーミンの若さに  
たじたじとなったが、それ以  
上に多くのご高齢の方が楽し  
んでいらつしやることに驚い  
た。負けてはいられない。

悠久のサンスクリットの名を掲げ「チャンドラーン」\* 月面着陸

\*月面探査機

神々に導かれしか「アデイティア」\* が太陽探るインドの不可思議

\*陽観測衛星

八月は二度の満月新暦のゆえなることと子に教えらる

被爆地の歌読みたしとふいに言う友に押されて言葉を紡ぐ

長崎と広島に住みし歳月のサイレン響く夏を忘れず

原爆忌は登校日です集まって黙禱します皆いのります

生涯を「赤い背中」の写真手に谷口稜すみてるさん非核訴えき

暑きひる竹山広歌集取り出してふうと息つく 眠ってよいか

戦争を知らぬ子とわれ膝並べ「ラストエンペラー」観し夏の夜

五カ国で作りし映画は当事国日本がおらぬと子が呟けり

葛の花噎せかえる道をかき分けて兵士のごとき錯覚の夏

憧れはブルース・リーの足の蹴りスカッと跳びたし真一文字に

逝きてなお構え崩さぬブルース・リーことしの暑さ一蹴りにせよ

よく冷えた「月山の水」の水滴が白々として秋の彼岸入り